ダンボールと紙おむつを使ってのトイレづくり

ボランタリー活動奨励賞

ナースの目線で被災地に寄り添う

全国訪問ボランティアナースの会 キャンナス

東日本大震災発生後、ボランタリー団体による支援活動が活発に行われている。平成23年度の奨励賞にも過去最多の63件の推薦があり、震災対応の活動にも光をあてるため、表彰団体を増やした。

全国訪問ボランティアナースの会キャンナスは、東日本大震災での活動で数々のマスコミに取り上げられ、本も出版している団体だ。代表の菅原由美さんからお話を伺った。

活動のきっかけ

キャンナス結成のきっかけは、代表の菅原さん自らの介護体験に由来する。看護師になった菅原さんは、末期がんの母親を自宅で介護するためにわずか10か月で退職しなければならなかった。母親を始めとし、父親や祖母、義理の両親の介護を続けて行い、先が見えず息抜きのない在宅介護の大変さを痛感した。介護を一人で抱え込み、時に優しくなれないこともあった。

「看護に疲れた家族」を休ませてあげたい。そのため、潜在看護師と呼ばれる資格はあるが勤務していない看護師のマンパワーを活用して問題を解決しようと菅原さんは考え、１９９７年（平成９年）３月に全国訪問ボランティアナースの会キャンナスを立ち上げた。

キャンナスの名前は、デキル（Can）ことをデキル範囲で行うナース（Nurse）を意味していており、普段は、在宅看護の支援のため、介護保険では対応できないニーズに対応したサービスを提供している。

東日本大震災の被災地へ

２０１１年（平成23年）３月11日に東日本を襲った大震災後、キャンナスのもとには、被災地支援を志願する多くの看護師、歯科衛生士、理学療法士、作業療法士、保健師などが集まった。

被災地に向かう人たちに、菅原さんは「被災地では沢山の人が待っている。それぞれの分野で精一杯、自分の免許に恥じない行動をとるように」「組織としての責任は私がとるので、現地に入ったら、各々が自分の判断で、自分の責任で行動し、誰かの指示がなくては動けないようではいけない」と伝えた。

この言葉の背景には、かつて、菅原さんが阪神・淡路大震災の被災地にボランティアで行った際に学んだ教訓があった。

当時、全国から多くの看護師がボランティアとして来ていたが、一刻を争う混乱の中でも指示がないと動けない人たちばかりであった。被災地支援のボランティアは自己判断・自己責任で素早く、臨機応変に行動しなくてはならないと考えた。しかし、個人の判断・責任には限界がある。ボランティアに正確な情報を伝え、彼らの行動を支援するボランティアコーディネーターの存在も重要であるとも感じた。

今回の被災地支援では、そうした経験を存分に生かした。

菅原さんの言葉を聴いたボランティアは、その期待に十分応えた。

他のボランティア団体が常にまとまって行動するのに対し、キャンナスのボランティアたちは、各自が自分で課題を見つけ、自分で考え、自分で行動する。

一見、放任主義のようにも見えるが、菅原さん自身も50回近く現地に足を運び、自らの目で被災地のニーズを確認している。また、現地との連絡を密にし、ボランティアからの要請には全て応えるようにした。

トイレ掃除から始めた

被災地に行き、まず感じたのは衛生面の劣悪さだった。

避難所のトイレはどこも詰まっていて、洋式トイレは座面に立って中腰で用を足さなくてはいけないほどだった。また、室内は皆が土足で入るため、泥やほこりがそこら中に落ち、いつ感染症が蔓延してもおかしくない状態であった。そこでキャンナスは、まずは衛生面を改善するため、トイレを掃除し、避難所を土足禁止とするところから始めた。

また、避難所で暮らす人々の健康維持にも気を配った。硬い体育館の床で毎日寝ている避難者の多くが睡眠不足になっていた。そこで、ムアツ布団１００セットを急ぎ用意した。しかし、１００セットでは、避難者全員に行き渡らない。看護師の目で判断し、高齢者や体調を崩している人に優先的に提供した。

こうした衛生面の改善や被災者の健康管理など医療関係者ならではの視点を生かしたキャンナスの活動は現地の被災者に大変感謝された。

被災者だけでなく、現地に行っているボランティアの体調管理にも気を配った。被害の大きかった被災地の最前線で過酷な活動を続けていると、肉体的な疲労だけでなく、精神的な負担が非常に大きい。ボランティアの精神面での異変が報告されてきたが、彼らの多くは異常の自覚が薄く、現地に残り頑張り続けようとした。事実、現地に行っていたボランティアの多くが、無我夢中過ぎて当時の記憶があまりないと言う。

健康相談。キャンナスのピンクのＴシャツは、安心感を与えた

菅原さんは、現地に留まろうとするスタッフを定期的に戻すなど、健康維持に細心の注意を払った。やはり、現地から離れ、客観的に大局を判断できるボランティアコーディネートは必要だと感じた。

現地でのキャンナスの評判は高まり、「夜もキャンナスの人たちは避難所にいてくれるので安心する」「キャンナスのピンクのＴシャツを見るだけでほっとする」などと言われ、避難所になくてはならない存在になっていった。

キャンナスの活動を見て、看護師を志すようになったと言ってくれる人もいた。こうした感謝の声に支えられながら、延べ１万１０００人を超えるキャンナスによる被災地での活動は続いている。

奨励賞応募のきっかけと受賞の効果

奨励賞を応募したきっかけは、団体の活動を広く社会に知ってもらうため、そして、被災地支援のための活動資金を得るためであった。

奨励賞を受賞し、自分たちの活動を社会は見てくれているのだ、評価してくれているのだと分かりうれしかった。「受賞によって、団体の結束が強まり、新たな力の源泉になった」と語る。

今後の活動

震災から2年が過ぎようとしているが、まだまだ被災地では、健康相談など、看護師に求められるニーズは多い。「キャンナスの活動を必要としている人が被災地にいる限り、今後も活動は続けていきたい」と菅原さんは語る。

代表の菅原さん

＜団体情報＞

団体名：全国訪問ボランティアナースの会　キャンナス
活動開始時期：1997年3月
代表者：菅原　由美
会員数：50名
TEL：0466-26-3980
FAX：0466-27-8280
HP：
http://www.nurse.gr.jp/index.html
活動地域：日本全国（本部：藤沢市）
活動分野：保健、医療又は福祉の増進
活動概要：手厚い介護・看護を目指した潜在看護師による有償ボランティア活動を実施。東日本大震災後の被災地支援では「寄り添う」活動を展開している。

ユニバーサル絵本を読む

ボランタリー活動奨励賞

点字付き絵本でみんな一緒に

ユニバーサル絵本ライブラリー
Ｕｎｉ Ｌｅａｆ

目の見えない子どもも目の見える家族・友だちと一緒に読めるユニバーサル絵本の製作・貸出を行うユニリーフ代表の大下利栄子さんにお話しを伺った。

ユニバーサル絵本とは

ユニバーサルデザインとは、初めからできるだけ多くの人が使えるよう配慮したデザインのことで、ユニリーフが作成するユニバーサル絵本は、その考えで作られた絵本だ。

絵本の間に、点字付きの透明なシートが入っているので、文字を目で見て読むことも、シートの上から点字をなぞって読むこともでき、目の見えない子もそうでない子も、同じ絵本で一緒に楽しめるように作られている。

ユニリーフは、このユニバーサル絵本を一冊一冊、手づくりで作っている団体だ。

作り方は、次のとおりだ。

まず、市販の絵本を解体して、ばらばらにする。

次に透明なシートをページと同じ大きさに裁断し、そのシートに点字タイプライターを使って点字を打ちこむ。

点字には漢字がないため、語句の区切れをわかりやすくするための分かち書きのルール等細かな規定がある。それを遵守しながら、作成するのは神経を使う作業だ。特に点字を習得中の子どものための本なのでシート全体を作り直すことも少なくない。

点字付きの透明シートが挟まれており、
点字が絵を邪魔しない工夫となっている

出来上がったシートを絵本に挟みこんで、全体の形をもどし、穴を開け、リングを通して、再製本する。

こうした絵本を扱うのはユニリーフが日本で唯一であり、できあがった絵本は、学校や希望者に、無料で貸し出されている。

活動のきっかけ

大下さんが、この活動を始めたきっかけは、大下さんの娘さんが2歳半の時に失明したことだった。

当初は絶望したというが、「よい一日の積み重ねが、よい人生になる」という言葉を支えに一日一日を精一杯生きよう、「失明したにもかかわらずではなく、失明したからこそという人生を」と願ってきた。娘さんは、明るく穏やかでのびのびした子どもに育ち、普通小学校卒業時には学校から「彼女と一緒に過ごしたことは子どもたちにとって財産」と言ってもらえた。大下さん自身も「これは小さな奇跡」と思っているという。

その娘さんが中学に進学し、大下さんには自由な時間ができ、「障がいがある子のために」何かをしようと考えていたときに、視覚障害児教育の専門家から、モデルとなるイギリスの取組について教わった。

「クリアビジョン（ClearVision）プロジェクト」。１９８６年（昭和61年）に一人の図書館司書が作った視覚障害児のための点字付き絵本から始まった活動は、いまや蔵書１３、０００冊以上の郵送貸出図書館に発展し、北欧や北米の国々でも親しまれているという。

イギリスに問い合わせながら、作り方を学び、実践していったのがはじまりだ。

視覚障害と絵本

「絵本は、こころの栄養」とも言わ

れ、絵本にわくわくと心躍らせた経験を持つ人は多い。こういった名作絵本を知らずに過ごしてしまうのは、もったいない。

しかし、点字付きの絵本は少ない。1年間に千冊の新しい絵本が出版されている中で、市販されている点字付き絵本や触る絵本は今までに50数冊しかないという。それも、なじみがないものが多い。

大下さんは、普通の絵本を読み聞かせるなら絵のない本を選んだし、訓練や通院等に忙しく、絵本を娘さんに読む余裕もなかった。

娘さんは本が好きだったが、こんな理由から、絵本は読まずに通り過ぎてしまった。

絵本づくりを始めた当時は、娘さんに手伝ってもらった。点字の間違いをチェックしながら、絵本を楽しみにしてくれた。大下さんは、「彼女は中学生だったけれど、絵本を改めてひととおり知ることができてよかった」という。

今、ユニバーサル絵本により、目の見えない子どもと目の見える子どもが小さい頃から一緒に絵本を読むことができる環境になった。

目の見えない子どもが一人で読んでいても、目の見える周囲の人は、何を読んでいるか知ることができる。

絵本を通じて、「一緒に楽しむ」「同じ体験をする」「感動を分かち合う」ことができる。

目の見えない人の存在を「身近に感じる」ことによって、障害のある人とない人の間にあるバリアが低くなることを願っている。

高校生もつくってみた

県立逗子高校で、「ユニバーサル絵本づくり」の出張授業を行った。

高校生たちの身近に視覚障害のある人は少なく、点字を読んでいる人を見たことはない。

情報のインプットの仕方が違うだけだと知ってほしい。目の見えない人の存在を身近に感じ、普通の人だということを知ってもらいたい。ユニバーサルデザインについて考えてもらいたいとの考えからの活動だ。

5コマの授業で、1クラス1冊の絵本を作り上げる。

初めて点字を打つ高校生たちが、手分けしながら、絵本を製作する。授業時間中には終わらず、放課後の作業になってしまうことも多い。

最後の授業では、娘さんを同伴し、生徒が作った本を読んでもらった。自分たちが作った絵本がちゃんと読めるものになっていることに、歓声があがった。

奨励賞を受賞して

奨励賞の副賞で、性能のよい製本機を買い、もっともっとよい絵本をそろえたいと考えているという。

また、奨励賞を受賞したことで、「科学絵本」の製作に専門家の先生にアドバイスをもらえることになった。

これまでニーズがありながら、難しくて手が付けられなかった「科学絵本」の製作に力を入れられる。

科学絵本にも名作が多くあり、楽しい「絵」をいかにして触って読めるようにするか、工夫が必要で、新たな挑戦となる。

現在、蔵書数は225冊。ユニバーサル絵本になるのを待っている絵本はまだまだ多い。

「絵本」をきっかけとした、ユニバーサルな世界を目指す活動に今後も期待したい。

絵本を手に説明する大下さん

＜団体情報＞

団体名：ユニバーサル絵本ライブラリー　Unileaf（ユニリーフ）
活動開始時期：平成20年7月
代表者：大下 利栄子
会員数：14名
TEL/FAX：046-897-6213
HP：http://unileaf.org/
http://www.facebook.com/pages/ユニリーフ/374155602671959
活動地域：神奈川県内を中心に全国
活動分野：保健、医療又は福祉の増進
活動概要：市販の絵本に透明点字シートを挟み入れた「点字付き絵本（ユニバーサルデザイン絵本）」を製作するとともに、同絵本を貸し出し、皆で長期に使ってもらえるように図書館の運営を行っている。

ボランタリー活動奨励賞

ヨコハマらいぶシネマのロゴ
「ぶ」の字にポイントがある

映画を一緒に楽しんで
ライブで音声鑑賞ガイド

ヨコハマらいぶシネマ

目の不自由な人にも映画を楽しんでもらおうと、映画に音声ガイドを付ける活動をしているヨコハマらいぶシネマ代表の鳥居秀和さんからお話を伺った。

発足のきっかけ

ヨコハマらいぶシネマの発足は、２００８年（平成20年）にさかのぼる。東京都を中心に活動する視覚障害者のための映画鑑賞支援団体「シティライツ」が横浜で「かながわバリアフリー映画祭」を開催した。その参加映画館だった「シネマ　ジャック＆ベティ」の支配人から同映画館での音声ガイドの依頼があり、「ヨコハマらいぶシネマ」は発足した。

毎月第１日曜日は音声ガイドの日

活動の中心拠点は、横浜市中区黄金町にある「シネマ　ジャック＆ベティ」だ。毎月第１日曜日に通常の上映に併せて、音声ガイドを実施している。

日にちを固定しているのは、理由がある。外出の際に付添いを必要とする視覚障害者は多い。団体でも、最寄駅からや映画館内部の誘導サービスを行っているが、日にちが決まっていれば付添いボランティアを確保してもらいやすいだろうと考えた。

音声ガイド作成作業

音声ガイドをつけるために、上映日に向けた作業は、厳しい。

第１日曜日に上演される映画が決まるのが、概ね３～４週間前。その日の上演作品５～７本の中から、過去のガイド作品とのバラエティを考慮しながら、１本選定する。

資料を集め、実際に映画を見ながら、概ね２週間かけて、自分たちでガイドのための台本を作っていく。

音声ガイドで映像のうちの何を伝えるかが難しい。ふとした表情、視線、服装、風景が大きな意味を持つ。それらを映像から読み解き、的確に伝え、映像を頭の中でイメージできるようしなければならない。洋画はセリフの吹き替えも必要である。また、映像説明はセリフと重ならないように配慮しなくてはならない。

映画の登場人物が多いと、７人チームでガイドを付けることもある。

上映１週前の週末に全員で集まり、検討会を開催する。

作成した台本を基に実際に音声ガイドを付け、３～４人の視覚障害者や映画に詳しい人にモニターしてもらう。「何をガイドするのか」を決めていく上で、視覚障害者のモニターの意見は重要だ。意見を反映して台本の修正を繰り返し、リハーサルをする。

映画館閉館後、22時から特別上映してもらい、パソコンを持ち込んでその場で台本を作ったり、検討会も深夜２時３時となることもあり、準備の１か月はあっという間だという。

らいぶガイドの魅力

当日は映写室からライブで音声ガイドを実施し、視覚障害者は、ラジオで音声ガイドを聞く。イヤホンで聞くから、他の人の支障にはならず、一緒に映画を楽しむことができる。

「ヨコハマらいぶシネマ」では、ライブでガイドを付けていくことにこだわっている。一発勝負で、録音もしない。録音には、スタジオも必要だし、編集も必要となる。それよりも、なるべく多くの映画にガイドを付けるため、ライブにこだわる。

そこには、「今、見たいものを今！今、上映されている映画を見てほしい」という強い思いがある。

映画後の交流会

終了後には必ず見た人と音声ガイド

をした人との交流会を開催する。映画の内容が伝わったか確認するとともに、ガイドしきれなかった内容を伝える機会ともなる。そこで聞ける生の反応が、次回につながる。

鳥居さんは「いい映画は、人を饒舌にする」という。それぞれの想いがこもった言葉を聞けるのがうれしく、映画を深く理解していることに驚くことも多いという。

音声ガイドの現状

アメリカでは、音声ガイドや字幕が法的に義務付けられているという。

鳥居さんは、「日本の取組は遅れていて、障害をテーマにした作品以外に音声ガイドがついている作品はほとんどない。映画の作り手には、音声ガイドがあれば、視覚障害者が映画を理解し、楽しめることを理解して欲しい」と指摘する。

映画「エンディングノート」のＤＶＤには、ヨコハマらいぶシネマによる音声ガイドが「視覚障害者対応副音声」として収録された。砂田監督の監修を受け、そのこだわりも含めて音声ガイドをすることができて、「理想のパターン」だったという。

映画への情熱

定期上映以外にも、美空ひばりの古い映画など、年間約30本の映画にガイドを付けている。

人気のある作品だとアンコール上映もして、80人が参加することもある。人知れずの作品だと5人しかいないこともある。

しかし、毎回参加する人や埼玉から2時間もかけて来る人もいる。視覚障害者が1人で2時間もかけて来るのは大変なことで、映画に対する情熱を感じる。

視覚障害者は中途失明した人も多く、昔見た映画をもう一度みたいというニーズも高い。

ポルノ作品にガイドを付けたときには、「40年来の夢がかなった」と好評だったという。

映画ガイド以外にも港北区民ミュージカルにガイドを付けたり、横浜市立盲特別支援学校で音声ガイド体験会として、アニメにもガイドを付けている。

盲学校で映画を音声ガイド付きで観る経験をして、映画を楽しむ習慣を持って欲しいと願う。ガイドする側にも、目の前で、子どもたちが歓声を上げて喜んでくれるのを見られるのは、大きな収穫だ。

奨励賞を受賞して

受賞をきっかけに取材が増え、ＮＨＫでも取り上げられたりするなど、知名度が上がったという。

また、副賞（賞金）では、練習のためのプロジェクターや音声ガイドで使用するラジオや送信機を購入し、ガイドのための環境整備の一助となっている。

今後の展望

団体のメンバーには、声優やアナウンサー志望の人、朗読ボランティアの人、視覚に障害がある人、大学生のボランティアなどもいる。30名のメンバーで、年30本の映画にガイドを付けており、活動は、多忙だ。

しかし、別な映画館でもやりたい、映画を見る人を増やしていきたい、と夢は広がる。

「もっともっと面白い映画を見せたい！」という人と「もっともっと映画をみたい！」という人の思いが、音声ガイド付き上映が「あって当たり前」になるように、映画館で一緒に泣いて笑い、感動を共有するための活動を広げていっている。

代表の鳥居さん

＜団体情報＞

団体名：　ヨコハマらいぶシネマ
活動開始時期：2008年６月
代表者：鳥居　秀和
会員数：30名
TEL/FAX：045-243-9800
（シネマ　ジャック＆ベティ　気付）
HP：
http://www.koganecho.com/hamalive/
http://ameblo.jp/yokohama-live-cinema/
活動地域：主に横浜市内
活動分野：保健、医療又は福祉の増進
活動概要：視覚障害者の映画鑑賞を支援するため、映画の場面解説の音声ガイドを実施するとともに、移動支援を行う。

ブラジル人学校の子ども達と野外活動

ボランタリー活動奨励賞

ブラジル人コミュニティと架け橋へ

ＣＲＩ

Children's Resources International

チルドレンズ・リソース・インターナショナル

ブラジルでの支援活動の経験をいかし、日本国内でブラジル人コミュニティと日本人社会との架け橋になる活動を行っているＣＲＩ（チルドレンズ・リソース・インターナショナル）の代表の宮ヶ迫ナンシー理沙さんと事務局の大嶋敦志さんにお話を伺った。

活動のきっかけ

ＣＲＩは、１９８８年（昭和63年）前代表の小貫大輔さん（現・東海大学教養学部教授）が、ブラジル・サンパウロ市のモンチアズール・コミュニティ協会を支援するために設立した団体だ。

同協会は、シュタイナー教育思想のもとに、サンパウロ市南西部のファベーラで、保育園・学童保育所や診療所の運営、職業訓練など様々な支援活動を行っている。

ファベーラとは、仕事を求め農村から都市部に移り住んできた貧しい人びとが暮らす貧民街のことで、貧困を抜け出せない悪循環が大きな問題となっている。

大学生だった小貫さんは、同協会でボランティア活動に参加し、その活動を『耳をすまして聞いてごらん』という本にまとめている。

日本からブラジルへの支援

小貫前代表のブラジルでの活動に感銘を受けた日本人が、いまも、同協会の門を叩き、ファベーラでのボランティア活動に加わっている。宮ヶ迫さんや大嶋さんも含め、ＣＲＩの役員・スタッフの多くが、同協会でのボランティア活動を経験し、帰国後、ＣＲＩの活動に参加している。

ＣＲＩがブラジルで行ってきた活動は、大規模だ。郵貯の国際ボランティア貯金からの資金等を得て、保育施設の建設、漁村でのコミュニティセンターの建設など、地域のニーズに寄り添いながら、子どもたちの将来のためにプロジェクトを行ってきた。

海外支援から国内支援への転換

海外を中心に活動を行ってきたＣＲＩだが、２０１１年（平成23年）から「足元の日本国内に、やるべきことがある」と、国内での活動、ブラジル人コミュニティの支援に重点を移すことを決めた。

学生であれば、現地で活動する時間もあった。しかし、日本に戻り、働き始めると、日本からブラジルを支援する距離感や、仕事と活動の両立の難しさなどの現実に突き当たった。

また、ブラジルは経済発展を続けているが、「足元」の日本にいるブラジル人は、長く続く不況の中で、不安定な雇用におかれ、将来設計を描けない状況にある。また、その子どもの教育環境も決して良いとは言えないなどの課題もあり、違和感を感じたからだという。

ブラジル人コミュニティ

神奈川県内では、横浜市鶴見区に多いが、県央部では厚木市・愛川町、平塚市などにも点在している。ブラジル人コミュニティの状況を把握するのは難しいという。

横浜には、在日ブラジル人の支援団体も多く、鶴見区役所と協働したＮＰＯの活動も始まっている。しかし、支援団体もない県央部のブラジル人には、日本人社会との接点が少なく、課題が多いと感じていた。

ブラジル人学校と地域を結びつける

ＣＲＩは、日本人社会との接点が少ないブラジル人を、ブラジル人学校を中心にネットワークを広げようとしている。

日本では、日本国籍のない子どもに

は就学させる義務がなく、日本の学校に入学しても、言語や文化の違いから適応できないことがある。様々な理由で日本の学校に通わない子どもたちの受け皿となっているブラジル人学校は、厚木市にもある。

地域の人たちは、日本に住んでいるのに日本語が話せない子どもたちを不思議に思っており、学校側も地域がどのように考えているのかわからず、「お互いに窓を開けない状態」だったという。

ＣＲＩでは、イベント等の支援を通じて、学校に子どもを通わせる親の意識改革や、地域住民とブラジル人学校を結びつける活動を行っている。

ブラジル人の親は、仕事で忙しく、子どもと一緒に何かをする機会があまりない。地域とのつながりはさらに少なく、「自分たちもここに住む住民だ」という意識付けが必要だという。

紙芝居コンクール

9月には、人形劇を開催した。日本語とポルトガル語の両方で人形劇を行い、その後親子で参加できる「人形づくり」のワークショップを行った。自然に、地域の人や、親、子どもが交流できる場となることを狙った活動だ。自治会で回覧板を回してもらったところ、50人もの参加者が集まった。

また、ゲームや既成の玩具でばかり遊ぶブラジル人学校の子どもたちに自然で体を使った楽しい遊びがあることを知ってもらうため、気持ちのよい公園に連れ出し、自然を学ぶといった野外保育活動を週1日程度実施している。

さらに、「ごはんと肉と卵だけ」「野菜は食べない」「飲み物は炭酸飲料」など偏った食生活をしていたり、日本に住んでいても日本の食を経験することが少ない子どもたちに、日本の食べ物を経験してもらう活動を行っている。納豆巻き寿司を作ったり、うどんをうったり、楽しみながらの食育だ。

マルチカルチャーキャンプ

各地の外国につながる子どもを集め、日本の大学生や社会人と触れ合う異文化交流キャンプを実施している。１００人以上の規模となるが、半数がブラジル人学校の子どもらだ。

大学生と過ごす三日間は濃い。

日本語の勉強への意欲を強め、大学への進学を希望するなど子どもの心に大きな変化が生まれているという。現在は、東海大学の大学生が中心になり、ＣＲＩは通訳・アドバイザーとしてバックアップに関わっている。

今後の目標・展望

団体創設からは25年を経過したが、宮ヶ迫さんは「団体としてはまだまだ成長段階だ」という。活動の中心を、ブラジルから国内へ移し、代表も代わった。ブラジル人のコミュニティの実態は、まだまだ研究すべき課題が多いという。

日本に住む「ブラジル人コミュニティとの架け橋になること」をテーマとするＣＲＩの活動は、これからも、ブラジル人に寄り添い、模索し、いろいろな人と連携しながら展開していくだろう。

宮ヶ迫さん（左）と大嶋さん（右）

＜団体情報＞

団体名：ＣＲＩ（チルドレンズ・リソース・インターナショナル）
活動開始時期：昭和63年７月
代表者：宮ヶ迫ナンシー理沙
会員数： 113名
TEL：0463-50-2215
（東海大学教養学部国際学科小貫大輔研究室方）
FAX：0463-50-2407
HP：http://www.cribrasil.org/index1.html
活動地域：県内を中心に日本各地
活動分野：子どもの健全育成
活動概要：ブラジルでの支援活動の経験を生かし、在日ブラジル人の文化・価値観を理解した上で、長年にわたり、学生ボランティアの協力を得て、異文化交流イベント（キャンプでの野外保育や日本食による食育）やワークショップなどの多文化共生活動を実施している。

ボランタリー活動奨励賞

まち歩きで、二宮の魅力を伝えたい

まちづくり工房「しお風」

二宮町は、相模湾に面し年間を通じて温暖な地で『長寿の里』として知られる。この二宮の魅力を伝えたいと奔走するまちづくり工房「しお風」代表の神保智子さんにお話を伺った。

活動のきっかけ

神保さんは、平塚市役所職員として、まちづくりや市民活動の支援に携わってきた。自らの手でまちをつくる楽しさ・喜びをそこで学んだ。その後、市役所を退職したが、「まちづくり」に対する情熱が消えることはなかった。

そこで、神保さんを支援する多くの人の声に背中を押されながら、地元である二宮町をよりよい町にしようと立ち上がった。

地域の魅力を伝える情報誌の創刊

当時の「市民によるまちづくり」は、アイデアや意見を聞かれるだけで、具体的な手法の検討や調整は行政が行っていた。

神保さんは「企画から実施まで自分たちがやった」といえるものをつくっていきたいと考え、１９９９年（平成11年）、住民主導のまちづくりを目指す地域コミュニケーション誌「しお風」を創刊した。

まちの魅力と課題を住民に伝えたいと考えたからである。人に伝えるには、自分が知らなくてはいけない。徹底的に町を探索し、取材を行った。生まれてから何十年も暮らしてきた二宮のまちであったが、新しい魅力や、これまで気づかなかった課題を発見した。

まちづくり工房「しお風」の設立

課題を解決するためには、他の活動団体との連携や情報交換が必要だと感じた。二宮町ボランティア連絡会に登録しようとしたが、登録するには、団体である必要があったため、「しお風」の発行に関わっていた仲間数名と協力し、まちづくり工房「しお風」を２００３年(平成15年)に設立した。

住民が発信する媒体へ

その後、活動の広がりに伴いメールマガジンやブログなどのインターネットを利用した情報発信を行うようになった。また、情報誌も、まちの課題の提起を主たる内容とした「しお風」と新聞販売店の力を借りてまちの魅力を発信する「湘南♡風と星物語」の二本立てで発信するようになった。

情報誌に対する反響は大きい。

商店主からは「記事を読んだお客さんが店にやってきたよ」と喜びの声が届く。記事についての問い合わせも多い。また、「このようなまちの課題、まちの魅力があるので、記事で取り上げてほしい」といった投書もある。

今や、情報誌は、団体だけがつくるものではなく、住民自らが題材を探し、情報を提供する、まさに住民発信型になっている。

道標

近年、吾妻山の菜の花を楽しもうと二宮を訪れる観光客は多い。しかし、他の場所まで足を運ぶ観光客は、少ない。

神保さんは、そうした観光客に菜の花以外の二宮の魅力を伝え、まちの活性化を図ろうと考えた。

まず、川勾神社に注目した。

川勾神社は、旧相模国で２番目の格式をもつ「相模国二宮」であり、町名

の由来にもなっている由緒ある神社だが、駅からのアクセスがよくなく、訪れる人は減っていた。

そこで、二宮ロータリークラブと連携し、駅から川勾神社までの散策ルートを作ろうと考えた。

みんなで現地を歩き、散策案内のための道標の設置場所を検討した。道標の形も、景観を壊さないよう配慮した。

そうして、２０１０年(平成22年)、散策ルート上に９つの道標と神社の境内に案内板を設置し、まち歩きを楽しむのに役立っている。

これからも「道標」のような工夫を加えることで、他の地域にもスポットを当て、それらの魅力を発信していこうと考えている。

ユニークな写真展

しお風は、まちの魅力を伝えるための写真展「二宮の魅力発見！未来に伝えたい写真展」を２０１２年（平成24年）11月から開催した。

これを読んだ人は、どこかのギャラリーを借りて、そこで開催したと考えるだろう。しかし、そうではない。

写真は、商店の外壁や店内など、それぞれのテーマに関係する町内13か所にメッセージを添えて直接展示した。

例えば、落花生店の外壁には、二宮の名産である落花生にまつわる古文書や製法の写真、大正時代の看板建築を残している店には町内のレトロな建物の写真を展示するなど、見た人が二宮の産物や歴史をまちなかで学べる仕組みになっている。

予定の開催期間は過ぎたが、「継続してほしい」という要望に応え、今も一部は展示中だ。今後は地域探検地図「walkwalk マップ」と連動させて、ますます充実させていきたいと語る。

まちなかが写真展会場となった

つなげる活動

神保さんは、「まちづくりのためには個が輝いていなくてはいけない」という信念をもち、まちづくりにおいて、「輝く個をつなげたい」と、住民同士や町内外の人々をつなげるコーディネーターとしての役割を果たしている。それぞれの「個」が自立し、それぞれの「よさ」を維持したまま、連携することによって生まれる力を引き出したいと考えている。

商店街などと連携し、高校生の視点によるまちづくりを企画した「walkwalk（ワクワク）青少年探検隊」、「地域ブランドづくり『風と星物語』検討会」、湘南地域で活動している女性たちによる「湘南を元気にする女たちの会」など、多様な個をつなげ、相乗効果が発揮できるような工夫をしている。

神保さんが残したい「二宮らしさ」

豊かな自然、懐かしい風景、みかんや星にまつわる伝承、温かい人情が二宮にはある。その「二宮らしさ」を守り、伝えていきたいという神保さんは、自身の活動を「小さな活動」と謙遜する。

「早春の吾妻山を彩る菜の花の花言葉は『小さな幸せ』です。それを日々の暮らしの中で感じることのできるまちをつくりたい」と願うその活動は積み重なって、大きな力となっていく。

神保さん

＜団体情報＞

団体名：まちづくり工房「しお風」
活動開始時期：平成15年 4月
代表者：神保　智子
会員数：9名
TEL：090-3142-9358
FAX：0463-70-1018
HP：http://www.scn-net.ne.jp/~shiokaze/
活動地域：二宮町を核に平塚市など県下
活動分野：まちづくりの推進
活動概要：二宮町の魅力を伝えるため、地域に密着した情報紙「しお風」を発行するとともに、各種情報媒体を駆使して地域の活動を紹介し、まちづくりの機運を盛り上げている。また、団体自らが様々なまちづくりの活動に関わり、人々や団体をつなげている。

寿クリーンセンターの店舗は、寿町の裏路地にある

ボランタリー活動奨励賞

寿町からポジティブアクション！

特定非営利活動法人
寿クリーンセンター

寿町を中心に雇用機会の拡充を図る活動をするＮＰＯ法人寿クリーンセンターの理事の岡実さんからお話を伺った。

寿町の変遷

元々、寿町は、日雇い労働者の街で、簡易宿泊所が多く立ち並ぶいわゆる「ドヤ街」と呼ばれた地域であり、今もそのイメージは我々の中に残る。

しかし、現在は、港湾労働の機械化や日雇い労働者を携帯電話で集めるなどの雇用形態の変化から、労働者の「寄せ場」としての機能は、ほぼ喪失している。かつて「労働力のプール」として栄えた寿町は、現在「福祉の街」に変わりつつあるという。

寿町を拠点として働いていた日雇い労働者の多くは高齢化によって、以前のような重労働に従事することができなくなった。２０００年代に入り、こうした人々を対象に、街には診療所やヘルパーステーションなどの福祉関係の生活基盤が多く見られるようになった。

岡さんは「かつての寿町に比べ、近年の寿町は大分治安も良くなり大人しくなった」というが、高齢者や障害者の多く住む街として、新たな問題も見られるようになった。

団体結成のきっかけ

ＮＰＯ法人寿クリーンセンターの理事長村田由夫さんは、元々、寿町内に居住するアルコール依存症の人たちに向き合う活動を行っていた。そこでは当事者が「ミーティング」を持ち、酒の上での失敗などの経験を互いに語り合うことで、酒を断つ生活を支え合うという手法をとっていた。

この方法によって多くのアルコール依存症患者がアルコールを断つことができた一方、依存症を再発させてしまう人もまた多かった。アルコール依存症の治療は極めて難しい。いったんお酒を飲んでしまうと、その後はとめどなく飲んでしまい、元の依存状態に逆戻りしてしまう。

断酒していた人が、再びお酒に手を出す大きな原因の一つに「仕事がなく、することがないので酒を飲む」というのがある。寿町に暮らす住民の多くは、高齢や心身の原因で、以前のような重労働はできず、その他の業務の経験もないので、仕事を探してもなかなか雇用してもらえない。

就労できない焦りや先の見えない不安から、またアルコールに手を出してしまう人は多い。

こうした現状を目の前にして、村田さんは、アルコール依存症の人たちの回復には、労働の機会を与え、自信と誇りを取り戻してもらう必要があると考えるようになった。

団体の結成と活動の開始

当時、村田さんは、寿町住人のアルコール依存症対策と並行して、寿町の不法投棄問題にも取り組んでいた。村田さんは、依存症患者に寿地区に不法投棄された家電を手分解する仕事を提供することで、依存症からの回復と街の美化という二つの目的を達成しようと考えた。

そうした考えのもと「寿地区のゴミ問題を考える会」を前身として、２００８年（平成20年）２月にＮＰＯ法人寿クリーンセンターが誕生した。

業務の内容は、高齢者や障害者が暮らす部屋の片付けや引越、亡くなった方が使っていた部屋の家財処分である。

当初は寿町内のみでの活動であったが、現在では神奈川東部全域及び県外からも仕事の依頼が入るようになった。

アルコールやギャンブル依存症、精神疾患などに苦しむ30代から60代の人が15名ほど働いている。生活保護受給者が大半で、また、過半数は障害認

定を受けている。

岡さんは、寿クリーンセンターの活動目的を、寿町に暮らす高齢者・障害者のデイケアと就労支援の中間のようなものと考えている。センターでの仕事は、依存症患者にはその回復の手段として、高齢者や障害者にとっては生きがいづくりの場・就労訓練の場として役立っている。

活動を通して、依存症に悩む人、高齢者・障害者に「自分は社会の役に立っているのだという自信を再び取り戻してもらえれば」と語る。

引越では、最賃以上の賃金を支払うという

基金21に応募したきっかけ

奨励賞に応募した理由は、「センターの活動についてもっと社会に知ってほしかった」からだ。

他のＮＰＯの活動と比べ、寿クリーンセンターの活動は商売の要素が強く、活動を維持するためには、常に事業収入の確保が必須である。仕事をもらうためには営業活動をしなくてはいけないのだが、岡さんは「奨励賞を受賞したことにより、団体の信用力が大きく上がり、よい宣伝になった。これからも、知事から表彰されている写真などを使わせてもらい、受賞をどんどんＰＲし、営業に役立てていきたい」と語る。また、副賞の80万円は、全て活動資金に当て、センターの事業拡充に役立てたとのこと。

今後の展望

将来、「もっと多くの人にここで働いてもらえるようにしたい」と岡さんは考えている。

しかし、こうした引越や清掃業務は企業も行っており、彼らとの競争が現実にはある。企業は、体力のある若い学生アルバイトを使い、効率的に作業を進めることができる。

それに比べ、寿クリーンセンターで働いている高齢者や障害者は、労働力としてハンディのある部分もある。より多くの人に労働の機会を与えたいが、誰でもいいからと雇用すると、同業者との競争に勝てず、経営が脅かされるというジレンマがある。

しかし、他の業者にはない、寿クリーンセンターならではの強みを生かし、市場での競争に負けないでいくつもりだ。長年、寿の地域コミュニティーに根ざして地道に活動を続けてきたことにより築かれてきた官民含めたネットワークが、主な顧客である高齢者・障害者の問題に対処するのに大きく役立っている。

また、広報活動に力を入れるなど、顧客を増やしていく努力も必要だ。現在の店舗の入り口は路地裏にあるので目立たず、寿町の住人でも、その存在を知らない人がいる。そのため、将来的には、広場側に入り口を移して宣伝効果を高めることも視野に入れている。

これからの寿町

寿町は、日雇い労働者の寄せ場から福祉の街へと変化したが、今後も寿町のもつ社会のセーフティーネット機能は変わらないだろうと岡さんは考えている。

生活に困窮した高齢者や障害者に加え、最近は、職に就けない若者も寿町に流入してくるようになった。

高齢者や障害者、若年貧困層などであふれる寿町。もしかすると寿町の抱える問題は、近い将来、日本が直面する問題の縮図なのかもしれない。

＜団体情報＞

団体名：特定非営利活動法人寿クリーンセンター
活動開始時期：2008年２月
代表者：村田由夫
会員数：10名
TEL：045-633-2608
FAX：同上
HP：http://kotobuki-clean-center.org/
活動地域：神奈川県東部
活動分野：職業能力の開発又は雇用機会の拡充の支援
活動概要：寿町に住む様々な問題を抱えている人たちを雇用し、引越しや清掃、リサイクルショップを経営している。

これまでの基金２１対象事業・団体等一覧

1)協働事業負担金

番号	事業名	申請者（団体名）	所在地	交付額（単位：千円）	事業実施年度
1	引きこもり青少年支援の協働ネットワーク事業	特定非営利活動法人 リロード　（楠の木学園）	横浜市港北区	44,640	H13～H17
2	市民による里山の保全と活用のシステムづくり	特定非営利活動法人 よこはま里山研究所	横浜市南区	20,500	H13～H17
3	小網代の森保全推進事業	特定非営利活動法人 小網代野外活動調整会議	横浜市港北区	10,290	H13～H17
4	女性のための緊急一時保護施設（シェルター）と外国人に対する相談事業	特定非営利活動法人 女性の家　サーラー	横浜市青葉区	37,000	H13～H17
5	犯罪や災害の被害者等に対する支援事業	特定非営利活動法人 神奈川被害者支援センター	横浜市中区	31,300	H14～H18
6	医療通訳派遣システム構築事業	特定非営利活動法人 多言語社会リソースかながわ	横浜市神奈川区	48,400	H15～H19
7	強迫的ギャンブラー（ギャンブル依存症者）の回復と社会復帰の為の事業	特定非営利活動法人 ワンデーポート	横浜市瀬谷区	38,620	H15～H19
8	地球温暖化対策地域学習センターの設置と体験型普及啓発・環境教育の仕組みづくり	特定非営利活動法人 ソフトエネルギープロジェクト	横浜市中区	43,300	H15～H19
9	アートを活用した新しい教育活動の構築事業	特定非営利活動法人 ＳＴスポット横浜	横浜市西区	43,375	H16～H20
10	野生動物救護に関する支援事業	特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会神奈川支部	川崎市中原区	25,000	H16～H20
11	不法投棄タイヤの収集・リサイクル事業	特定非営利活動法人 相模川倶楽部	平塚市	6,900	H16～H17
12	森林と都市生活者をつなぐ水源環境の保全・再生	特定非営利活動法人 緑のダム北相模	東京都世田谷区	23,500	H17～H21
13	行政相談窓口職員多言語対応＆相談能力向上研修事業	特定非営利活動法人 かながわ外国人すまいサポートセンター	横浜市中区	14,300	H17～H21
14	地域の活性化・働きたい若者就労支援ネットワーク事業	特定非営利活動法人 アンガージュマン・よこすか	横須賀市	42,206	H18～H22
15	野宿者に対する総合相談及びシェルター事業	特定非営利活動法人 湘南ライフサポート・きずな	藤沢市	49,235	H18～H22
16	外国につながりを持つ子どもへの教育・進路サポート事業	多文化共生教育ネットワークかながわ	横浜市中区	21,900	H18～H22
17	ＭＳＭ健康支援センター事業	横浜Ｃｒｕｉｓｅネットワーク	横浜市神奈川区	35,030	H19～H23
18	こども医療センター患者・家族滞在施設運営事業	特定非営利活動法人 スマイルオブキッズ	横浜市南区	11,874	H19～H23
19	地域生活交通創出・再構築事業	特定非営利活動法人 かながわ福祉移動サービスネットワーク	横浜市港北区	19,100	H19～H23
20	子どものシェルター運営事業、居場所のない子どもの電話相談事業	特定非営利活動法人 子どもセンターてんぽ	横浜市港北区		H20～H24
21	高次脳機能障害ピアサポートセンター設立等支援事業	特定非営利活動法人 脳外傷友の会ナナ	横浜市青葉区		H20～H24
22	県営いちょう団地在住の外国籍住民に対する包括的入居サポート事業、及び入居サポート事例の普及事業	多文化まちづくり工房	横浜市泉区		H20～H24
23	デートＤＶ（恋人間の暴力）防止のためのシステム構築事業	特定非営利活動法人 エンパワメントかながわ	横浜市神奈川区		H21～
24	アレルギー児を学校・園、救急隊との連携で支える研修事業	特定非営利活動法人 アレルギーを考える母の会	横浜市旭区		H21～
25	摂食障害者等の地域における総合支援事業	特定非営利活動法人 のびの会	横浜市金沢区		H21～
26	がん体験者による、がん患者・家族のためのピアサポート事業	特定非営利活動法人 キャンサーネットジャパン	東京都文京区		H22～
27	映像・メディアコンテンツ制作による青少年育成支援事業	特定非営利活動法人 湘南市民メディアネットワーク	藤沢市		H22～
28	伝統芸能〈祭囃子・神楽〉伝承の普及・啓発事業～「祭の音」プロジェクト	横浜やっしゃ鯛	横浜市泉区	8,441	H22～H23
29	地域資源「ひと・もの・こと」を活用し、持続可能な地域社会づくりを目指す、湘南「みかんの木パートナーシップ」プログラム	特定非営利活動法人 湘南スタイル	茅ヶ崎市		H23～
30	二子山山系の自然保護協働事業	二子山山系自然保護協議会	葉山町		H23～
31	地域と学校によるいじめ防止推進事業	特定非営利活動法人 湘南ＤＶサポートセンター	藤沢市		H24～

２）ボランタリー活動補助金

番号	事業名	申請者（団体名）	所在地	交付額 (単位:千円)	事業 実施年度
1	精神障害者のノーマライゼーションを進める市民の会	都筑ハーベストの会	横浜市港北区	316	H13
2	子どものための人権教育普及事業	国際子ども権利センター	横浜市都筑区	3,322	H13～H14
3	犯罪防止活動強化及び県民啓発推進事業	特定非営利活動法人 日本ガーディアン・エンジェルズ	東京都港区	4,000	H13～H14
4	横浜寿町地区近郊に住む生活保護受給者、路上生活者の医・衣・食・住にわたるセーフティネットの整備、及び自立自援できる環境作りの為の事業	特定非営利活動法人 さなぎ達	横浜市中区	5,505	H13～H15
5	母国語・母国文化教育事業	Ｇrupo ABC	川崎市多摩区	1,332	H13～H15
6	在住外国籍住宅入居事業	かながわ外国人すまいサポートセンター	横浜市中区	4,400	H14～H16
7	障害児の放課後・休日の活動支援及び障害のある青年の自立支援事業	特定非営利活動法人 わになろう会	川崎市中原区	6,000	H14～H16
8	精神障害者による有機野菜販売訓練事業	精神障害者就労支援の会	横浜市西区	6,000	H14～H16
9	青少年に科学のおもしろさを知らせる手づくり科学館事業	特定非営利活動法人 発見工房クリエイト	川崎市麻生区	6,000	H14～H16
10	ＤＶ被害女性に対する相談事業と支援ボランティア養成事業	ウィメンズネットサポート	横浜市中区	2,904	H15～H16
11	不登校状態にある青少年への回復活動参加促進事業	特定非営利活動法人 そだちサポートセンター	平塚市	6,000	H15～H17
12	不登校児、要配慮児の義務教育終了後における進学面・就業面・日常生活面の自立を支援する事業	特定非営利活動法人 ライナスの会	藤沢市	6,000	H15～H17
13	子どもの里山体験学習を小中学校と連益させる手立て	鎌倉中央公園を育てる市民の会（山崎の谷戸を愛する会）	鎌倉市	1,984	H16～H18
14	発達障害を持つ幼児及びその家族への子育て支援事業	特定非営利活動法人 フトゥーロ	横浜市緑区	4,424	H16～H18
15	海苔つけ体験教室と干潟のある海の公園つくり事業	特定非営利活動法人 川崎の海の歴史保存会	川崎市川崎区	5,230	H16～H18
16	農業特区・ＮＰＯ市民農園事業	特定非営利活動法人 子どもと生活文化協会	小田原市	2,000	H16
17	里山里地保全事業	特定非営利活動法人 自然塾丹沢ドン会	秦野市	5,440	H16～H18
18	ＤＶ被害女性自立支援活動事業・中期シェルターの運営	特定非営利活動法人 女性・人権支援センター ステップ	横浜市	6,000	H16～H18
19	ＣＡＰ（子どもへの暴力防止）教職員向けワークショップの提供事業	特定非営利活動法人 エンパワメントかながわ	横浜市神奈川区	5,452	H17～H19
20	新作能「横浜（仮題）」を作る	横浜飛天双〇能実行委員会	横浜市中区	2,000	H17～H18
21	青少年の非行克服支援及び悩む親たちへの援助活動事業	かながわ「非行」と向き合う親たちの会	横浜市青葉区	1,300	H17～H19
22	多文化共生事業	特定非営利活動法人 Ethnic Japan	横浜市旭区	275	H17
23	透析患者向け災害対策の策定	特定非営利活動法人 大和市腎友会	大和市	5,750	H17～H19
24	高大産連携による進路指導プログラムの開発・普及事業	特定非営利活動法人 ＮＰＯカタリバ	東京都中野区	3,250	H17～H18
25	在日コリアン生活文化資料館世代間交流事業	かわさきの在日高齢者と結ぶ2000人ネットワーク	川崎市川崎区	3,950	H18～H20
26	視覚障害者自立支援事業	特定非営利活動法人 パラボラジャパン	相模原市	2,150	H18～H20
27	湘南映像祭の開催及びメディア講座定期開催事業	特定非営利活動法人 湘南市民メディアネットワーク	藤沢市	3,945	H19～H20
28	海はバリアフリー　セイラビリティ活動	特定非営利活動法人 セイラビリティ江の島	藤沢市	4,748	H19～H21
29	スクール・セクシュアル・ハラスメント防止ワークショップ	特定非営利活動法人　スクール・セクシュアル・ハラスメント防止関東ネットワーク	東京都中野区	1,228	H19～H21
30	日タイ協働による在日タイ人児童・生徒の学習支援事業	日タイを言葉で結ぶ会　ラックパーサータイ	横浜市金沢区	2,000	H20～H22
31	人身売買問題を通して“人権”について考える機会の創出事業	てのひら～人身売買に立ち向かう会	東京都大田区	2,143	H20～H22
32	コミニティカフェ事業	特定非営利活動法人 ふらっとステーション・ドリーム	横浜市戸塚区	2,000	H21
33	外国につながる中高生の教科学習のための教材作成プロジェクトⅠ～Ⅲ	特定非営利活動法人 中学・高校生の日本語支援を考える会	横浜市泉区	4,254	H21～H23
34	食べ物依存症(摂食障害）者回復支援事業	ファルク	横浜市保土ヶ谷区	3,120	H22～H23
35	目に見えない軽度の発達障害をもつ子どもたちとその親御さんへの支援	特定非営利活動法人 発達サポートネットバオバブの樹	茅ヶ崎市		H22～H24
36	「NPO見本市」プロジェクト	特定非営利活動法人 藤沢市市民活動推進連絡会	藤沢市		H22～H24
37	障がい者のための定期乗馬会	特定非営利活動法人 RDA横浜	横浜市港南区		H22～H24
38	在日外国人子どもたちの「居場所」づくりと教育・生活相談・「支援」事業	特定非営利活動法人 在日外国人教育生活相談センター・信愛塾	横浜市南区		H22～H24
39	『視覚障害者の漢字学習（中学校編）』冊子作成	点字学習を支援する会	横浜市神奈川区	1,850	H23
40	難病の地域生活支援をめざした交流・研修事業	特定非営利活動法人 サポートＫＡＺＥ	小田原市		H23～
41	病院の子どもに笑いを届けるホスピタル・クラウン活動	特定非営利活動法人 日本ホスピタル・クラウン協会	名古屋市中村区		H23～24
42	発達障がいに端を発する学習困難生徒への学習支援と、その教授法・教材・教具の研究・開発・実践	学習サポート・スコラ	横須賀市		H24～
43	音楽と子育てする幸せ♪事業	特定非営利活動法人 ハッピーマザーミュージック	横浜市港北区		H24～
44	軽度の発達障がい児に対する療育相談事業及び保護者支援	特定非営利活動法人 厚木なのはな	厚木市		H24～

３）ボランタリー活動奨励賞

番号	団　体　名　等	所在地	主　な　活　動　内　容	副賞金額（単位：千円）	対象年度
1	信愛塾	横浜市南区	在日外国人の子ども達への交流・学習支援	800	H13
2	寿支援者交流会	横浜市中区	野宿生活者への訪問活動（パトロール）、交流・学習会活動	800	
3	アジアの女性と子どもネットワーク	横浜市中区	タイ山岳民族の子ども達の就学援助・学校建設支援、HIV感染の予防啓発教育	800	
4	特定非営利活動法人　パーソナルサービスセンター トムトム	茅ヶ崎市	地域の障害児・者の生活・余暇活動支援	800	
5	フリースペース　たまりば	川崎市高津区	「子どもと大人」の居場所づくり	800	
6	リリーフクラブ	横浜市南区	社会的弱者に対する住環境改善支援	800	H14
7	子育て支援グループ　ゆめこびと	藤沢市	子育て中の親への支援活動	800	
8	インドシナ難民の明日を考える会	東京都	在日インドシナ難民への日本語・学習指導、インドシナ本国（主としてカンボジア）の恵まれない方々への支援	800	
9	ボランティア会　ランパス	横浜市旭区	病院に来る患者及びその家族を対象とした支援活動、病院での行事の開催	800	
10	カラバオの会（寿・外国人出稼ぎ労働者と連帯する会）	横浜市中区	外国人労働者の労働相談活動	800	
11	有川百合子	横浜市戸塚区	丹沢大山国定公園のゴミ撤去活動、自然保護活動	400	H15
12	特定非営利活動法人　ままとんきっず	川崎市多摩区	子育て支援を必要とする親子・関係者に対する支援活動	800	
13	特定非営利活動法人　川崎水曜パトロールの会	川崎市川崎区	川崎市内の野宿者のパトロール活動、病弱者への個別訪問活動、野宿者との交流事業	800	
14	特定非営利活動法人　ペガススの会	足柄上郡山北町	子どもを対象とした自然体験事業、子どもの健全育成活動	800	
15	サルサガムテープ	茅ヶ崎市	障害を持つメンバーの音楽活動による自立支援、音楽に興味を持つ障害者へのサポート活動	800	
16	コトバノアトリエ	平塚市	言語表現のワークショップ等を通じた青少年の育成活動	800	H16
17	特定非営利活動法人　Ｉ　Ｌove　つづき	横浜市都筑区	地域の調査等を生かしたまちづくり活動	800	
18	特定非営利活動法人　聴導犬育成の会	鎌倉市	聴覚障害者のための聴導犬育成・普及活動	800	
19	特定非営利活動法人　かわさき自然調査団	川崎市宮前区	川崎市全域の自然調査を通じた環境保全活動	800	
20	平間わんぱく少年団	川崎市中原区	和太鼓を通じた青少年の居場所づくりや育成活動	800	
21	ジョブコーチプラス１	横浜市青葉区	知的障害児・者援護就労活動	800	H17
22	多文化まちづくり工房	横浜市泉区	日本語学習支援・多分化共生の促進活動	800	
23	劇団湘南山猫	藤沢市	童話や民話、民族楽器演奏を取り入れた音楽劇など、オリジナル劇公演活動	800	
24	ほっと茅ヶ崎準備室	茅ヶ崎市	消費者と商店会の連携によるまちづくり活性活動	800	
25	よみきかせボランティアグループ　おはなしばる～ん	伊勢原市	読み聞かせによる子どもの健全育成活動	800	
26	特定非営利活動法人　さなぎ達	横浜市中区	寿地区ホームレスへの支援活動、まちづくり活動	800	H18
27	特定非営利活動法人　湘南ふくしネットワークオンブズマン	藤沢市	地域ネットワーク型福祉オンブズマン活動	800	
28	きこり会	相模原市	知的障害者共生促進活動	800	
29	特定非営利活動法人　AIDSネットワーク横浜	横浜市中区	エイズに対する予防啓発活動	800	
30	パレスチナのハート アートプロジェクト	相模原市	アートによるパレスチナ難民支援活動	800	
31	特定非営利活動法人　神奈川子ども未来ファンド	横浜市中区	子ども・若者の育ちを支えるための寄付プログラムの開発実施や県内ＮＰＯへの資金助成	800	H19
32	特定非営利活動法人　子ども虐待ネグレクト防止ネットワーク	伊勢原市	電話相談を中心とした児童虐待防止活動	800	
33	カラカサンー移住女性のためのエンパワメントセンター	川崎市幸区	DV被害などの問題を抱える外国籍女性とその子ども達への自立支援活動	800	
34	特定非営利活動法人　よこはまチャイルドライン	横浜市保土ヶ谷区	子ども達の声を電話を通して受け止めるチャイルドライン活動	800	
35	精神保健ボランティアグループ　　ひびき	相模原市	精神障害者への居場所の提供を中心とした当事者間及び市民との「仲間づくり」活動	800	
36	宇宙船（不登校から学ぶ会）	横浜市栄区	不登校や引きこもりの子ども達とその親に対する支援活動	800	H20
37	特定非営利活動法人　平塚・暮らしと耐震協議会	平塚市	地域と連携した耐震補強の推進と地域力向上活動	800	
38	ステップ国際理解	横浜市戸塚区	国際理解、国際交流のための小中学校訪問活動	800	
39	エコサーファー	藤沢市	地域通貨の活用による地域活性化活動及び環境意識の啓蒙	800	
40	知的障害者スポーツクラブ　アスリートクラブ藤沢	藤沢市	スポーツを通じた障碍者の健康増進、仲間づくり活動	800	
41	ヒロコ・ムトー（本名　相澤　紘子）	横浜市港北区	子どもたちへの、いじめの克服と生きる勇気を与えるための朗読講演活動	400	H21
42	なでしこ防災ネット	秦野市	家庭や地域を守る女性を対象にした防災知識や技能の普及	800	
43	こどもの本のみせ　ともだち	横浜市港北区	子育てに悩む母親と子ども達へのおはなし会・読み聞かせ活動	800	
44	特定非営利活動法人　峠工房	横浜市泉区	知的障害者、発達障害児・者、小・中学生への生活・学習支援	800	
45	GLOBE PROJECT	横浜市南区	スポーツを楽しむことを通して社会問題の解決につなげる、スポーツイベント開催活動	800	
46	藤沢ウイングバスケットボールクラブ	横浜市旭区	知的障害者のバスケットボール支援活動	800	H22
47	朋ボランティアグループ	鎌倉市	障害者の就労の場を確保するための福祉製品販売店「手作り品の店　朋(とも)」の運営	800	
48	「水俣」を子どもたちに伝えるネットワーク	相模原市南区	子どもたちへ水俣を伝え、学ぶ場の提供	800	
49	日吉台地下壕保存の会	横浜市港北区	地域に残る戦争遺跡の見学により戦争と平和について考えてもらう活動	800	
50	紙芝居文化推進協議会	横浜市中区	紙芝居文化の普及推進活動	800	
51	全国訪問ボランティアナースの会キャンナス	藤沢市	看護師等による被災地支援活動	800	H23
52	ユニバーサル絵本ライブラリー　ＵｎｉＬｅａｆ	三浦郡葉山町	点字付き絵本の作成及び図書館運営活動	800	
53	ヨコハマらいぶシネマ	横浜市港北区	視覚障害者の映画鑑賞支援活動	800	
54	ＣＲＩ－Children's Resources International（チルドレンズ・リソース・インターナショナル）	平塚市	在日ブラジル人の支援・交流活動	800	
55	まちづくり工房「しお風」	中郡二宮町	地域コミュニケーション紙発行を中心にしたまちづくり活動	800	
56	特定非営利活動法人　寿クリーンセンター	横浜市中区	リサイクルステーション運営活動による就労の場の提供	800	
57	特定非営利活動法人　いこいの家　夢みん	横浜市戸塚区	ドリームハイツでの地域の交流サロン・介護予防活動	800	H24
58	特定非営利活動法人　イランの障害者を支援するミントの会	秦野市	イランの障害者へ車椅子などの福祉機器を送る支援活動と交流活動	800	
59	瀬谷区知的障害理解啓発グループ　ant mama	横浜市瀬谷区	知的障害の理解促進のための啓発活動	800	
60	神　幸雄	川崎市高津区	CPサッカー（脳性まひ者７人制サッカー）の普及活動と指導	400	
61	ALサインプロジェクト	藤沢市	AL（食物アレルギー）サインプレートの普及活動	800	

かながわボランタリー活動推進基金21とは？

かながわボランタリー活動推進基金21は、地域社会がますます多様化し、ボランタリー活動が果たす役割が次第に大きくなっている状況の中で、ボランタリー活動の自主性、主体性を尊重しながら、県とボランタリー団体等が協力し、協働して事業を進めていくことや、その活動を促進するための支援を目的として、2001年（平成13年）度に神奈川県が設置した基金です。

基金の運用益により、次の3つの事業で助成しています。

■協働事業負担金

地域社会にとって必要な公益的な事業で、ボランタリー団体等と県とが対等な立場でパートナーシップを組んで行うことで一層の効果が期待できると考えられる事業の推進を目的としています。

ボランタリー団体等と県が、事業実施に当たっての基本的なスタンス、役割分担を明らかにした協定書を締結した上で、両者が協働して行う公益を目的とする事業に対して、基金からその事業に要する経費（1,000万円を上限）を負担します。期間：5年間（毎年審査のうえ決定）

■ボランタリー活動補助金

ボランタリー団体等が地域社会の抱える課題の解決に向けて自発的に取り組む公益的な事業や、社会システムの改革を目指してチャレンジする先駆的な事業などの、立ち上げや新たな展開への支援を目的とし、基金からその事業に要する経費（事業に要する経費の2分の1と200万円のいずれか低い額を上限）を補助します。期間：3年間（毎年審査のうえ決定）

■ボランタリー活動奨励賞

この賞は、他のモデルとなるような実践的な活動で、地域社会への貢献度が高い活動に自主的に取り組んでいる団体等を表彰することによって、その活動の継続・発展を促進するとともに、県民の皆さんにボランタリー活動に対する関心をより一層高めていただくことを目的としています。

ボランタリー活動奨励賞として表彰状及び副賞として賞金（団体100万円、個人50万円を限度）を贈ります。

もっと知りたいときは下記HPをご覧ください。基金21で検索

- 基金についてもっと知りたいときは、 http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f5258/
- 過去の助成対象事業について知りたいときは、 http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f5258/p27673.html
- 応募したいときは、（募集案内・応募様式・説明会・募集期間） http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f5258/p27668.html

かながわのボランタリー活動を推進するための寄附を募っています。
詳しくはHPをご覧ください。（http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f7763/p491931.html）

かながわボランタリー活動推進基金 21　平成 23 年度助成終了事業成果報告書

未来を拓く挑戦者たち　vol.6

平成２５年３月発行

編集・発行　かながわ県民活動サポートセンター

〒221-0835　横浜市神奈川区鶴屋町 2-24-2
電話（045）312-1121（内線2831～2832）
http://www.pref.kanagawa.jp/div/0051/

古紙を配合した再生紙を使用しています